

# 書肆えん通信

No. 3

2016・08・15

書肆えん

秋田市新屋松美町

5-6

## 「塩谷家文書」と玄心寺の周辺

塩谷 順耳

### 昭和編の『秋田県史』に初登場

子供の頃から気が付いていたが、自宅床の間の隅に黒塗りの木箱があった。縦・横・高さが共に三〇×四〇センチ位であり大きくない。しかしその箱について家の中で話題になることは殆どなかった。やがて成長し学校に通っていた頃、それは戦後の昭和25、26年の頃であるが、当時県庁に務めながら秋田の歴史を研究されていた山崎真一郎氏が訪れ、「前々から捜していた塩谷家の子孫が漸く見つかった。是非伝来の古文書を見せてもらいたい」と言うことである。誰から聞いたかわからないが、塩谷家について調べていたらしい。その時親父が持ち出したのが例の木箱である。

### 「塩谷家文書」と玄心寺の周辺……塩谷順耳 1

中から和紙に御家流で書かれた文書が詰め込まれたかたちで出てきた。昭和30年代に入ると『秋田県史』の刊行事業が始まるが、近世編に二点ばかり使用された。これが塩谷家文書の世に出たはじまりである。しかしその後もあまり利用された事はない。長い歴史をもつ割には分量が少なく、まとまった課題と結びつかないからと思う。小生も県史の執筆者に加えられたが鎌倉時代中心の中世専攻であったため、家の文書を見ることはなかった。

そうこうしているうちに或る日、高齢になった親父が、「歴史をやっているからお前が持っていた方がよい」と言っただけで持参した。長兄は早くから上京して生活を移し、秋田で生活している兄弟で一番年上ということから持ってきたと思われる。それ以来小生が保管し今日に至ったが、一度だけ親戚に貸出したことがあり、その時木箱が失われダンボールに替った。

一方、昭和も40年代以降になると国の文化行政強化

などを背景に、全国レベルで文化財に対する興味・関心が高まり、歴史的内容をもつ文書類にも目が向けられてくる。県教委に文化課が設置されたのは昭和48年で、県博設置への動きも軌道にのり、同51年には開館の運びとなった。全国を席卷した博物館建設ブームの中では初期に含まれる。それに並行して市町村での資料館の整備も進み、その動きは自治体史刊行の隆盛に反映された。『秋田市史』の刊行事業は少し間をおき、同60年代になって編さん室が設置された。そして塩谷家文書は同室に勤務し、近世を研究されている菅原忠氏によって整理されることになり、文書に含まれている最後の藩主佐竹義堯の写真が初めて市史に掲載された。また文書の整理も同氏の御協力によってすめられた。なお公的機関によって収集されていた古文書類はそろ／＼満杯の域に達しつつあり、そうしたことから、寄贈を受け入れてもらうかたちで文書は市に収められ、結局、塩谷家文書は現在、秋田市蔵となっている。しかしどなたが利用するにしても不便はない筈である。

### 川崎城主、佐竹氏に従い秋田へ

文書の総点数は凡そ250点である。そのうち長い巻物の系図類が10点前後で、他はいわゆる公的内容の

一枚物で占められる。しかし家族のこと、家庭の日常生活にかゝわるものや、冊子・日記類は全くない。我々が子供の頃は木箱とは別に、古めかしい衣類等を虫干ししたこともあったし、女性用の短刀や、槍、佐竹藩主ゆかりの掛軸などがあった。恐らく古文書と共にいろ／＼な調度品も残されていたと思われる。

系図類のうち信憑性のあるのは戦国後期以降の記述で、それ以前は平安時代をも更にさかのぼる記述もあるが信はおけない。系図の中に「孝綱ヨリ道綱迄五代ノ内戦国ノ節ニシ親子兄弟嫁娶生死其説未詳故ニ其嗣子ノミ生死諡法名ヲ記録シ……」といった文言が記されているのは、実情を正直にとらえたものと考えてよい。間違いないと断定される系譜は社会が安定し、領主の移動が少くなった江戸時代で、その間の塩谷家の当主を並べると次のようになる。

……道綱―①義綱（永禄3年／寛永8年）―②貞綱（慶長10年／万治3年）―③重綱（寛永10年／元禄15年）―④方綱（万治元年／正徳4年）―⑤元綱（宝永4年／宝暦10年）―⑥久綱（元文4年／寛政6年）―⑦保綱（寛政6年／文政7年）―⑧紀綱（文政7年／安政元年）―⑨温綱（天保4年／明治42年）

即ち我々の計算では初代を義綱として九代続くこと

になる。以下、主だった当主について少し説明すると、先ず義綱は父の代から下野国（栃木県）塩谷郡の川崎城主であった。現在矢板市に川崎城の山城跡が残っている。ところが喜連川うれがわの城代をつとめていた父道綱の弟季綱が、幼少の義綱（当時一歳）に対し反乱を起こしたため、義綱は取巻きの重臣と共に川崎城を逃れ、隣の佐竹義重に援助を求めた。幸い義重は兵をすゝめ川崎城と城主義綱の安泰をはかった。結局、義綱は慶長2年、正式に佐竹氏の家臣となり、関ガ原合戦（慶長5年）後の佐竹氏国替えにより、同7年に秋田へ下ったとしてゐる。また別の系図には、川崎城は永禄4年に保つこと不能となったため京都伏見へ参府したが、秀吉と会う機会なく、慶長2年下野宇都宮（宇都宮氏の拠点）に下った。しかし宇都宮も没落したため常州（茨城県）へ参り、佐竹義宣と主従関係を結び、伯耆守と名乗って同7年、佐竹氏と共に秋田へ下り十二所城代になったとある。塩谷家は宇都宮家から分れたと記した系図もこの文書に含まれているから、双方深い関係にあったことは考えられる。

秋田に移った塩谷氏が南部藩境の十二所に配置されたことは史料的に確認されている。またその付近に知行地を与えられていた事も十分納得できる。そうした

ことから独鈷の大日堂をも大々的に修造することになった。そして塩谷氏の十二所時代は②代目の貞綱時代と、③代目重綱時代の中端まで続くことになる。十二所は南部藩領鹿角郡と秋田藩領秋田郡の境界地点であるため争いも生じ易く、塩谷氏がそれに奔走したことは間違いない。

十二所から角館へ配置替えを命じられたのは③代重綱の時で、延宝7年9月のことである。しかしその詳しい理由は明白でない。そして角館から久保田城下への配置替えへと続いていく。角館から久保田へ居を移したのは久綱の代と思われるが、どうしたものか久綱は同じ藩主のもとで「国相くにさし（家老）、そのあと禁固処分」を二度も繰返すという異例の処遇を受けた。上級家臣や藩主との間にいろいろな事があつたらしい。ともかく久綱は久保田城下に屋敷を割付けられ、以後代々明治までそこに居をおいている。各種城下絵図によると、通町橋を内町側から西に向つて進み、渡りきつた所で旭川沿いに北に向う細い路をたどると、数十米進んだ辺りで西に直角状に分かれる細い路がある。その丁字路の北側角に塩谷家屋敷があつた。佐竹氏の上級給人としては狭い屋敷である。ところで保戸野の武家屋敷についてはまだ解明されていない点が多い。旭川を境

に東側は武家屋敷、西側は町人の屋敷と言われてきたが、通町は通りに面した北側は商家が並ぶものの、その北には一面に武家屋敷が広がっていた。それは通町を境に北と南の道筋の走り方が全く異なる点によく表われている。『洪江和光日記』を通読すると、保戸野に「角館屋敷」と呼称される区画のあったことがわかる。また記憶に間違いなければ「松山屋敷」という文言があったような気もする。要するに保戸野武家屋敷は所預と関係深い町であったのでないか。というわけで塩谷家屋敷も保戸野の一角に割付けられたと察せられる。

### 温網の周辺

幕末と明治初年の変動期を過したの⑨代温網である。「温」は「なが」・「よし」・「はる」のうち何れかであるが、確かな事は伝えられてない。温網については通称の「弥太郎」が多くでてくるので、代々使われてきたその呼び名を使用していたものと思われる。系図によると藩主の相伴衆をつとめ、文久元年（一八六一）には国相になったとある。そして元治元年（一八六四）五月には江戸に登り、同年十月には藩主に代って京都の守衛を務めたが慶応元年（一八六五）

秋田に帰った、とある。また同年十月国相を免ぜられたとあるから、秋田に帰った時国相になったと察せられる。その後は明治2年（一八六九）五月執政となり、同年十二月には明治新政府下の大参事となり、同3年（一八七〇）七月にはそれを辞した。また義堯と共に東京に移り日暮里に居を構え、同3年十月から同9年（一八七六）まで佐竹家の家令を務めている。義堯は明治17年（一八八四）に死亡しているが、温網（弥太郎）はそのまゝ、東京にとどまった。それは同25年（一八九二）に佐竹家の家扶の辞令をもらっていること等に証される。他の文書類によると義堯のあとを継いだ義生に仕えたことがわかる。

以上、温網が付いた役職の推移を羅列してみた。動きのあわただしさは戊辰戦争や「にせ金事件」\*を通り過ぎた藩・県の実態を反映しているようである。藩主義堯については千秋公園に銅像が建っており、県民にはなじみ深い。それは藩が戊辰戦争に際し官軍の立場に立ったのが理由である。しかし義堯はもと々相馬藩主の一族で、先ず佐竹分家に入り、そこから藩主に昇格移転しただけに秋田とは縁が薄い。そのためか東京に移ってからいろいろな面で秋田とか、わることを避けたように思える。

\*秋田藩は戊辰戦争で膨大な戦争費用を使い、それが借財として残った。そのため藩内で通用する金を製造したが、これが後日「にせ金事件」とよばれることになる。

他方、「塩谷家文書」には温綱と関係が深いにか、わらず、「にせ金事件」にかゝる内容のものは一点もない。戊辰戦争についても、初期に藩兵の総指揮者として由利郡の南端に出陣したことを記したものが一点あるだけである。この時は病気を理由に職を辞してすぐ帰ったが、藩自体もすぐ軍を引き揚げているから、この時の出陣は次に続く本格的戦争とつながるものではなかったと言える。ともあれ温綱が本格的戦争の渦中でどういう位置にあったか記された文書はない。

話は少し変わるが、またデータがあるわけでないが秋田藩程、上級家臣が明治に入ると同時に城下から早く姿を消した所はないとされている。若しそうだとすると、その理由は戊辰戦争で秋田藩程焼打ち等で被害を受けた所はなく、また官軍に与しながら「にせ金事件」では中央政府の叱責を受け、被処刑者を出した結局、上級家臣はこれらに対する対応がまずかったうえ、この失態を自認するまでにいたらなかった点に求められそうである。義堯の供として上京した温綱は、

義堯の死後も東京に残り、明治末年に死亡するまで秋田に帰ることはなかった。他の上級家臣の動きも、どちらかと言えばあまり定かでない。尚、温綱の墓は板橋区内の寺にある。

### 塩谷家と玄心げんしん寺

江戸時代の城下絵図の中には、追廻町（別称御舟町。現榎山南中町）を「百姓屋敷」を記したものがある。道幅・道筋ともにそのまゝ、残ったと思われるが、南北に走る幅凡そ7〜8米、長さ70〜80米の直線状道路（俗称中町）を軸に、それに向って屋敷が両側から向き合いかたちで並んでいる。恐らく江戸時代の前期、町割りが始められた頃、付近に散在する農家が集住させられたものと思われる。玄心（信とも記す）寺（曹洞宗）が建っている所はこの通りを門前通りにする位置である（近年寺を建替える際、門と建物が若干寄った）。但し江戸時代初期にはこの位置に別の寺が記述されているから、玄心寺はその寺が横手に移ったあと建立されたもので、その時点は後掲する寺の由緒書によると寛文年間（一六六一〜七二）であったことが分かる。前述のように玄心寺には由緒書が残っているが、それによると寺は佐竹東家の保護を受けながら維持され

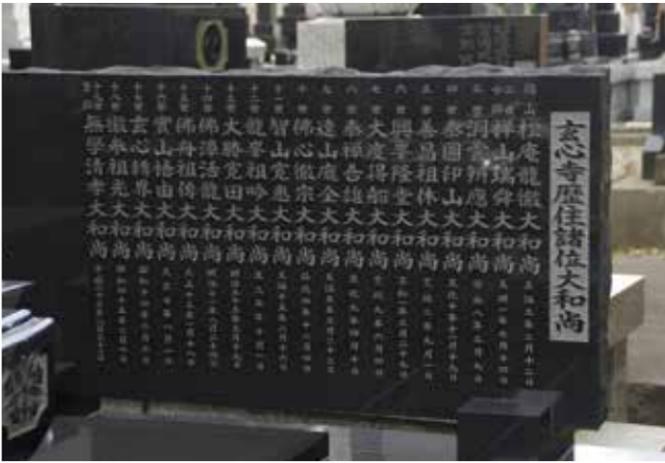


現在の玄心寺（秋田市檜山川口境 18-3）

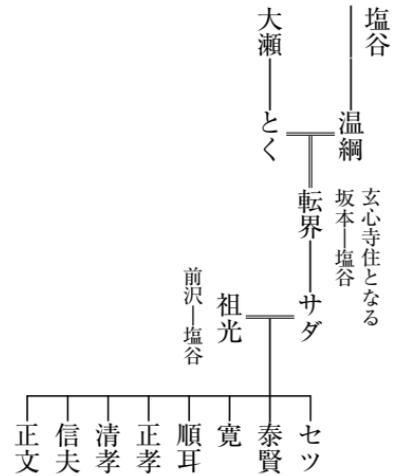
てきた。周知のように佐竹家は既に茨城時代、東・西・南・北の各分家が成立しており、秋田へ移ってからもそれらの名称を保持したまゝ、北家は角館、南家は湯沢、東家は久保田、そして西家は大館等々に、拠点を構えた。そのほか由緒書には玄心寺が東家当主の三代から禄を与えられたことや、禄について確認した内容のものがある。我々が子供の頃、その具体的内容はわからなかったが、この寺は「お東（おとう）さんから保護を受けた」とよく聞かされてきた。しかしこうした保護は、城下の武家・商家の檀家が少なかったことを意味しており、明治以降の寺の経営難につながったらしい。境内に城下衆につながる墓地が殆どない事にそれが表われているが、明治・大正期の檀家が城下町に含まれない牛島地域やそれに接する開地域に多いことから推測できる。要するに明治以降は新興の牛島方面に檀家を求めたことであろう。他方、寺の住職に世襲、いわゆる祖父―父―子といった血縁による継承の痕跡が薄いことも指摘できそうである。即ち佐竹藩主と関係が深いため他から突然住職が入ったり、突然出て行ったことが多かったのではないかということである。明治以降は全く変わるが、江戸時代を通しては佐竹氏と関係のある人物が閑居寺として利用しやすかつ

たように思える。

次に塩谷家と玄心寺との関係であるが、あわせて温網の後継も問題になる。ここで温網の後継を記述すると次のようになる。



玄心寺歴任住職。玄心転界、徹参祖光、無学清孝らの名がみえる



転界は温網の後を継ぎ玄心寺住となった。出自は保戸野の武家町に屋敷をもつ佐竹藩主家臣坂本家の男子である。明治6年生まれと伝え昭和14年寺で死亡した。寺に何時入ったか、そのいきさつも聞いていない。温網と関係があったとすれば、塩谷家と同様に保戸野に屋敷があったことである。また転界は子供の頃京都の宇治付近を拠点に遊学している。その時点は明治10年代であるが寺に入る前か後かは不明である。なおかつて栃木県矢板市に「塩谷朝業顕彰会」があり、昭和50

年、鎌倉時代歌人朝業に焦点をあて歴史書『塩谷朝業』を刊行している。それによると転界は温綱の妻方の実家から連れてきたとなっている。しかし史料・出典は記していない。また坂本家と大瀬氏との関係も不明である。何分、温綱は存命中であったが東京から動いておらず、記録もないのでこの辺のいきさつは分からない。当時秋田には塩谷の一族が多数いた。後に秋田幼稚園を経営した塩谷嘉綱氏系や、県副知事を歴任した塩谷末吉氏系などもそれに含まれる。にもか、わらず坂本家が温綱の跡をついだとすれば何らかの事情があったものであろう。転界の跡は祖光が継いだ。前沢氏から入るが、前沢ももとは城下に屋敷をもつ佐竹氏家臣で槍術にすぐれていたという。ともあれ玄心寺住職は転界（十七世）、祖光（十八世）の二代で終わり、その後清孝（十九世）が前沢を名乗って住職を務めた。

他方、温綱の奥方とくは夫の死後数年間遺品の整理につとめた。秋田に戻り転界の居る玄心寺に入ったのは大正6年頃で、その際伝わった古文書類・物品を持参したと思うが細かい事はわかっていない。秋田へ帰る時使用していた駕籠は10年くらい前までポロポロの状態で寺に残っていた。あらためて振り返り、印象深い事として残るのは、転界は静かであるが侍らしい面

があり、祖光ともく、一徹なところがあったということである。

### 系図はつくられる

「塩谷家文書」を通してみると、武家が武家としていかに系図を大事にしてきたかが分かる。先に触れたように、系図は点数こそ少いが一点毎の分量は可成り多い。しかも紙質が良く丈夫であるため、系図だけは後世に伝えようという熱意が伝わってくる。封建時代は「家の名譽」とか「家の権威」が大切にされたから当然と思われる。今日、就職する時は必ず履歴書を提出することになっているが、江戸時代、仕官する場合は系図が必要であった。従って江戸時代は系図がつけられた時代と言うこともできる。その意味でも系図を史料として使用する場合は吟味が必要で、そのまま、信用すると間違った内容になることもある。名族であってもその点は同様で、特に戦国時代を含めそれ以前になると、安東氏のように何種類もの系図が残ることになる。

作られる点では神社の縁起も同様で、むしろ系図以上である。神社は自らの権威を高めることにより、それが喜捨や収入につながるとなるとやむをえない面は

ある。歴史の研究者は神社縁起を基本史料として利用することは先ず無い。どうしてそのような縁起ができたかを考えるヒントになるが、それ以上は無理である。但し神社にまつわる昔の古文書が伴っていれば別途考える余地は出てくる。幸い玄心寺には縁起めいたものは残っていない。ただ佐竹東家との関係を示す古文書が残っている点では、百%と言えないが幸運であった。

### 追廻町おいまわしまち

今はこの町名はないが、我々が子供の頃、玄心寺の門前通りにあたる俗称中町と、エ卍の字に当る部分を追廻町と呼んでいた。そして寺が建つ寺側は追廻町と向き合いながら川尻町川口境に区画されていた。玄心寺の東側にある弘願院（浄土宗）も川尻町川口境であり、また昔、「石の風呂」（銭湯）も川尻町川口境であった。大正時代の前期、「川尻」は村で南秋田郡に区画されていたから、寺の境界は可成り区画が変更された地域になる。

ところで追廻の地名がどこからきたのか、また何を意味するのか全く不明である。我々子供の頃、学区は築山であったが、生徒数が抜群に多かった。当時は集団登校であったが、学校に近づくにつれ、各通りから

集団が集まってくるが、追廻は一〇〇人を少し超えていた。他は、七、八人から多くても二十人くらいである。それでいて町内の大きさはあまり変わらない。次に言えるのは嫌われた地域であったことである。「あの町を通ったら何もしないのになぐられた」という友達は何人も居り、「あすこの町には行かれない」という評判が漂っていた。恐らく他の町から来た人に対し反感をもつ町であったからと思う。劣等意識でもあったのか。住んでいながらいやな思いがしたが、町の中では争いはなかった。『渋江和光日記』を通読すると一カ所だけ追廻が出てくる。渋江家の下屋敷は濁川と川口、そして追廻にあったと記されている。但し濁川は鉄砲の練習に、川口は弓の練習にそれぞれ使用されたほか、川口は桑や野菜を栽培していた。それに対し追廻については何の記述もない。先述のように百姓屋敷とあるが田地と結びついたものでないから、検地帳に記載される百姓でなく、要するに集住させながら、どっちにもつかない層がいたということであろう。

幸い幕末に近い弘化（一八四四〜四七）の頃、町の北西端に鹿島神社が勧請された。八幡社や神明社の勧請は普通であるが、この時点でこの場所への鹿島社の建立は非常に珍しい事で、久保田城下ではあまり例が



鹿島神社（秋田市榴山登町）

ない。しかも祭りは盛大で船をつくり馬口労町から川尻を通って新屋の新川添まで引いて雄物川に流す風がしばらく続いた。神社には般若の面が保存され、祭りの時はそれを冠って町内の各家々をまわり家内安全を祈禱する風が残っていた。面を冠る人は時折り替ったが、昭和の時代は日本画家として中央でも著名であった町出身の舟山三朗氏がそれに当った。なお版画家勝平得之氏はすぐれた作品を残しているが、その色を工面して東京から送ってくれたのは舟山氏という。二人の友情が二人の芸術作品を支えていた。

すべて今は昔の話になってしまったが、普段あまり気のつかないところにも歴史がぎざまざっている。

（前秋田県歴史研究者・研究団体協議会会長）



弘化2年に建てられた「倉稲魂神碑（うかのみたまのかみひ）」。平成10年、秋田市指定文化財に指定された。「舟山三朗画伯顕彰碑」も境内に建立されている

## 【後記】

寺田和子詩集『七時雨』を、前田勉氏（秋田県現代詩人協会会員）が七月三十一日付けのブログ（<http://www.geocities.jp/maedaben/>）で紹介してくれた。

寺田和子さんの第4詩集『七時雨』が刊行された。高校教師時代から高校生時代の詩活動に関与され、秋田県高等学校文化連盟文芸部会設立メンバーのお一人でもあった。第一詩集『わたしの顔』の前書きで、中学時代の恩師が寺田さんの詩や性格について触れられている。

（以下引用）小さなノートに詩らしいものを書いてきて「先生、これ詩です」と、批評を求めてきたのは一年生の半ばすぎだったろうか。ほとんど毎日のように彼女はつくることをはじめた。（略）中学を卒業するまでには、そのノートが五、六冊以上になつていたはずである。（引用終）

寺田さんが教師として詩人として生徒に深くかわつてきたのは、こうした中学生の時に感じた恩師の姿を見据えていたからかも知れない。

この度の詩集『七時雨』の中から、第二行目が持つ意図、効果が際立っている「八月のモニュメント」と題する次の作品を紹介したい。

### 「八月のモニュメント」

一九四四年 私は生まれた

二〇〇八年夏 ハーメルンの朝

古い教会で見た大きな二本の角にかかげられた十字架

一九一四〜一九一八・一九三九〜一九四五  
刻まれた数字に足が止まる

リーベルズドルフ村の墓地にも

同じ数字を刻んだ石碑があり  
その両側の墓碑は

十代から四十代の男性ばかり  
二十歳と十八歳の息子を持つ友の

声が震えている

ヒロシマの日

マールブルクのエリザベス教会に

バッハのオルガン曲が響く

\* \* \*

このたび、高校の恩師塩谷順耳先生の『秋田地方史の諸問題——中世から近世へ——』を出版することができた。先生とは、『上小阿仁村史』『能代市史』などの郷土史でも一緒に仕事をしたが、本書では、専門の中世以外に、近世のこともかなり書かれている。そして、掲載誌にもよるが、わかりやすく書かれていて、歴史愛好者にも興味深いものになっていると思われる。

「はしがき」に「塩谷家の文書」とあったので、それにまつわることをこの「通信」3号にお願いした。このなかに、塩谷朝業という歌人の記述があったので、「ウイキペディア」で調べたところ、「源実朝に仕えて歌詠みの相手となる」とあり、略歴では、

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての武士・御家人・歌人。宇都宮成綱の子。母は平忠正の長子の新院藏人長盛（新院は崇徳天皇の事）の娘。実父と養父の名を取って朝業と名乗る。下野宇都宮氏の生まれだが、当代の清和源氏流塩谷氏当主朝義に子

が無かったことから、朝義の娘婿となり塩谷氏の名跡を継ぐ。系図では、子に塩谷親朝、笠間時朝、26歳で出家して親鸞の弟子となった塩谷朝貞（賢快・肥前法師）、三人の男子の間に一人ずつ娘（第二子、第四子）がいる。

とあった。注（2）の出典として、『喜連川塩谷系譜』『喜連川町史』があげられている。

また井上隆明著『新版 秋田の今と昔』（平成六年、東洋書院。初版は昭和五十二年）では、次のように記されている。

玄心寺（曹洞宗）は、正保二年（一六四五）手形の白馬寺六世竜徹和尚の、閑居寺として建てられた。明治の俳人安部松霞、松哉の墓がある。

同寺の住職塩谷氏は、武士の出だ。鎌倉時代の正治建仁のころ、栃木の宇都宮業綱の二男が、塩谷朝業と称し、茨城の矢板市に川崎城を築き、あたりを塩谷郡と称した。のち佐竹氏に合併し、秋田入りしてからは、十二所城代、代々塩谷伯耆を名乗り家老も勤めた。

一説として、参考までに紹介する。

（丁）